

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ブエノスアイレスのスペイン語イントネーションの実験音声学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yanagida, Reina メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1476

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



〔博士論文審査の要旨〕

本論文は、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで話されているスペイン語のイントネーションの特徴を客観的に捉えようとする試みである。録音音声を実験機器で計測することによって得られた数値をもとに、ToBI-A (Tone and Break Indices Ampliado) という記述法を用いて、対象となる地域のスペイン語のイントネーションの特徴の一部を捉えることに成功した。

学位申請者は、2008～2009年にブエノスアイレスにあるアルゼンチン国立科学技術研究所聴覚研究部門に研究生の資格で所属し、アルゼンチン人スタッフとともにイントネーションの研究に従事し、Sp-ToBI (Spanish Tone and Break Indices) 及び ToBI-A の記述法の専門的訓練を受け、研究発表を行ない、かつ本論文のデータを集めた。その知見と得られたデータをもとに帰国後執筆したのが、本論文である。

スペイン語イントネーションは重要な研究テーマでありながら、我が国では木村琢也清泉女子大学教授が率いるチームを除いては、その解明に取り組む研究者が乏しい。ましてやアルゼンチンのスペイン語に特有のイントネーションという、地域を限定した客観的分析はまだ現れていない。その中であって学位申請者は、木村教授の助言も求めつつ、上記のようにスペイン語圏の最先端の研究グループに身を置いて研鑽を積んだ。それゆえ、本論文には高い学術的価値と独創性が認められる。

本論文は4つの章と終章から成る。第1章は「導入」と題し、問題提起、イントネーションに関する先行研究の紹介、および専門用語の説明に充てられる。

第2章「イントネーション表記法」では、まず ToBI (Tone and Break Indices) という記述法を紹介し、それをスペイン語の記述に適するように改良した Sp-ToBI、さらにアルゼンチンのスペイン語の記述のために手を加えた ToBI-A の説明を行なう。

第3章「Amper プロジェクト」は、「ロマンス諸語使用地域の韻律に関するマルチメディア言語地図」の作成をめざす国際企画を紹介する。この企画には上記のアルゼンチン国立科学技術研究所聴覚研究部門も加わっている。

以上の3つの章は、スペイン語のイントネーション研究の概説として見れば、質的にも量的にもその意義を認めることができるが、本論文にあっては主題を導くための前置きであり、これに紙数の大半を費やしているのは論文の構成上、問題である。

第4章「ブエノスアイレスとマドリードのイントネーション比較実験」に至って、ようやく本論文の主題が論じられる。使用する文は {La cítara / La guitarra / El saxofón} se toca {con pánico / con paciencia / con obsesión}. ({ギター / ギター / サクソフォン } は { 恐怖を伴って / 辛抱強く / 強迫観念を伴っ

て}演奏される。)の組み合わせによる9つの文,またはそれぞれの全体疑問文を加えた18の文である。これは「名詞句 + 動詞句 + 前置詞句」という構造を持つ文である。文中の名詞は,3音節から成り,ストレスが最終音節にあるもの,その1つ前の音節にあるもの,2つ前の音節にあるものが選ばれている。ブエノスアイレスの被験者2名,または4名と,スペインの首都マドリードの被験者1名,または2名に上記の文を発話させ,録音した。マドリードの被験者を加えたのは,対象とする地域の特徴との比較が目的である。

得られたデータを ToBI-A の記述法を用いて分析した結果,ブエノスアイレスのスペイン語のイントネーションには次のような特徴があることが分かった。第1に,全体疑問文のピッチ曲線に着目すると,マドリードのスペイン語とは次の点で相違が見られる。名詞句と動詞句の間に ip (intermediate phrase) の境界がある。マドリードのスペイン語では発話全体が1つの ip となる。動詞句のストレス音節でピッチが上がる。文末の前置詞句ではストレス音節の位置によってイントネーションが異なる。マドリードのスペイン語では常に上昇調になる。

第2に,聴覚印象をもとにすると,次の特徴が見られる。文頭では単語を強調して発話するが,その後はストレス音節でも卓立を持たせることなく,流れるように文末に向かう。マドリードのスペイン語では,文頭のピッチアクセントはそれほど強くないが,文末は強い。ピッチの上下幅はそれほど大きくないが,ピッチが上下する頻度が高い。またピッチ曲線の傾きが変わりやすい。マドリードのスペイン語より1つの音節を発話する時間が長い。

これらの指摘は,印象論ではなく,客観的な計測によって導かれたものであり,大いに評価できる。用いた文の種類の少なさ,被験者の少なさを批判することは容易だが,これだけの分量のデータでも ToBI-A で分析するには大変な労力を要することを念頭に置くべきであろう。また,アルゼンチンの他の地域の話者や,マドリード以外の地域の話者と比べることなしに,上記の諸点を「ブエノスアイレスのスペイン語の特徴」と見なすことには問題がないのかという指摘も可能だが,提起された疑問を解決する道のりの第1歩としては十分容認できる妥当な手法であろう。

終章では,本論文の要旨と今後の展望が示される。やや情緒的な筆致のエピローグになっていて,得られた結論が読みとりにくい。

【論文審査結果】

論文についての全体的評価は,前項に記したとおりである。以下では,細部についての評価について述べる。

第1に,一部の術語の使用に不統一が認められる。特に ip (intermediate

phrase) と IP (Intonation Phrase) という術語の理解が一貫していない。[[_{IP} [_{IP} la cítara] [_{IP} se toca con pánico]] のような構成が仮定されている部分と, [[_{IP} la cítara] [_{IP} se toca con pánico]] という構成になっている部分がある。

第 2 に 説明がやや不十分な箇所がある。p.63 の $\log z\text{-score} = \log(f_0 / mg) / \log \text{deg}$ に用いられた略記 mg, deg がそれぞれ media geométrica, desviación estándar geométrica を示すという説明なしに提出されている。同ページから始まる表 5, 6 など、内容の説明が欠けている。p.100 の図 12 の数値は被験者全体の平均値だが、そのことが明らかにされておらず、分かりにくい。

第 3 に、手法について疑問がある。ToBI-A ではピッチの尺度として ERB (Equivalent Rectangular Bandwidth) という数値を用いているが、これはあまり適切とは言えない。ERB は上昇調、下降調におけるピッチ変化の大きさを比べるには適しているが、声域が異なる複数の話者の音調パターン全体を比べるのには向いていない。そもそも ToBI が本論文の目指す記述にふさわしいかどうかという問題につながっていくかも知れない。

第 4 に、結論の述べ方に改良の余地がある。聴覚印象をもとにした特徴の「...卓立を持たせることなく、流れるように文末に向かう」と「ピッチが上下する頻度が高く、ピッチ曲線の傾きが変わりやすい」とは、内容的に矛盾している。これらを整理して「文の前半では上下動が激しく、後半ではなだらかになる」のような記述にまとめることが可能だと思われる。

第 5 に、得られた数値の統計処理が不十分である。p.91 の表 1 および表 2 の数値は、カイ 2 乗検定してみると有意差がなく、p.92 の表 3 の数値には有意差があることが分かるが、そのような適切な検定が行なわれていない。また、p.96 に記されている t 検定の結果も、単に「有意差がある、ない」と書くだけでなく、t 値、p 値も記すべきである。

【最終試験結果】

最終試験は、2013 年 2 月 5 日、本学三木記念会館で実施され、福嶋教隆（主査、司会進行）、宮本正美、Montserrat Sanz の 3 名の本学教員と、木村琢也 清泉女子大学教授が審査にあたった。審査は公開で行なわれ、最初に学位申請者が論文要旨を述べた後に、各審査委員が論文に対する意見、感想、質問を述べ、申請者が回答するという形式で進められた。

審査員からは、上記の「論文審査結果」に記したさまざまな講評をはじめ、内容に詳しく踏み込んだ忌憚のない意見が数多く開陳された。論文全体のバランスや分析機器について、イタリア語など他の言語のイントネーションとの関係について、また、「目指す特徴は、今回の記述では隠れてしまう部分に存する」という学位申請者の主張について、質問や批判が出された。また、今後は

Elisabeth O. Selkirk が行なっているような統語論と音韻論の関連に留意した研究を参考にすることも望ましいという助言もあった。

学位申請者は、これらの質問に対して誠実に回答し、主張すべきところは適切に主張し、指摘された誤りや助言についてはこれを受け入れた。最後に会場の参加者からも質問、意見を得て、公開審査は終了した。

公開審査後、4名の審査委員は別室で協議を行なった。本論文はスペイン語のイントネーションについての、我が国における数少ない本格的研究であること、得られたデータや導き出した結論が十分な意義を持つばかりでなく、第1～3章のイントネーション研究の概説も価値があることが評価された。

そして、本論文が本学大学院博士課程文化交流専攻の博士（文学）の学位を授与するに十分な価値があることを審査員全員が認め、最終結果を「合格」とすることに決定した。